

こは羽さかて来くれたり』

梅花先春

野尻

鶯もまた訪ひやらぬ梅の花

ふくさの風に香をろそへける

長閑けかる御世のしるしを見せんとや

梅ささにけり春まぢもせて

全

杉山

けふ降りし雪まの梅は咲にけり

まぢかき春を人のしるへく

春またてささ出にけり庭の梅

梢にうたふ鶯もかぢ

梅花先春 二首

下山 陸治

降る雪にましりて匂ふ梅の香に

春待つ人や心よすらむ

春待たて咲きにけらしも雪のまに

薫りは高し梅の初花

池水鳥

同

ふけてゆく夜半にや霜のまざるらむ

羽ふさひまぢさ池のむら鳥

大分の縣をさしてちらしの軍よ出立たむ

文苑

とする前の夜故郷の夢を見ければ

同

旅といへは暫しちこりの惜まれて

長き夜あかぬ古郷の夢

我郷里なる鏡の里を見むと學の友數多來

たりけるに

同

名にしおふ鏡の池は清けれと

うつるさと夏のやどろはつかし

歳暮

同

おこたり乃身まはしはしと思へとも

とよめもあへぬ年のくれか

俳句 (冠句附)

乳 貫 更けし人戸を叩兼

○○

夕 涼 團扇忘れて戻る橋

××

春の風 また薄寒し若菜摘

□□

梅の花 魁愛づる冬籠

××

月に泣く 罪をらぬ身の嶋に暮れ

△△

月の影 明かるうてよし夕涼

□□

帯になる 高嶺の腰を回はる雲

××

電信機 世界を括る球の糸

□□

四十五